

1st 「実務研究論文の書き方」

2022年4月16日

永 松 俊 雄

○職歴等

1979年 熊本県入庁
1990年 在シアトル日本国総領事館 領事
1996年 熊本県 知事秘書
2007年 同総合政策局 政策調整監
2008年 室蘭工業大学大学院 教授
2011年 崇城大学 教授 総合教育センター長
2020年 同大学 非常勤講師

○学 歴

1979年 慶応義塾大学 経済学部卒 2005年 熊本大学大学院 修了 学位：博士（公共政策学）

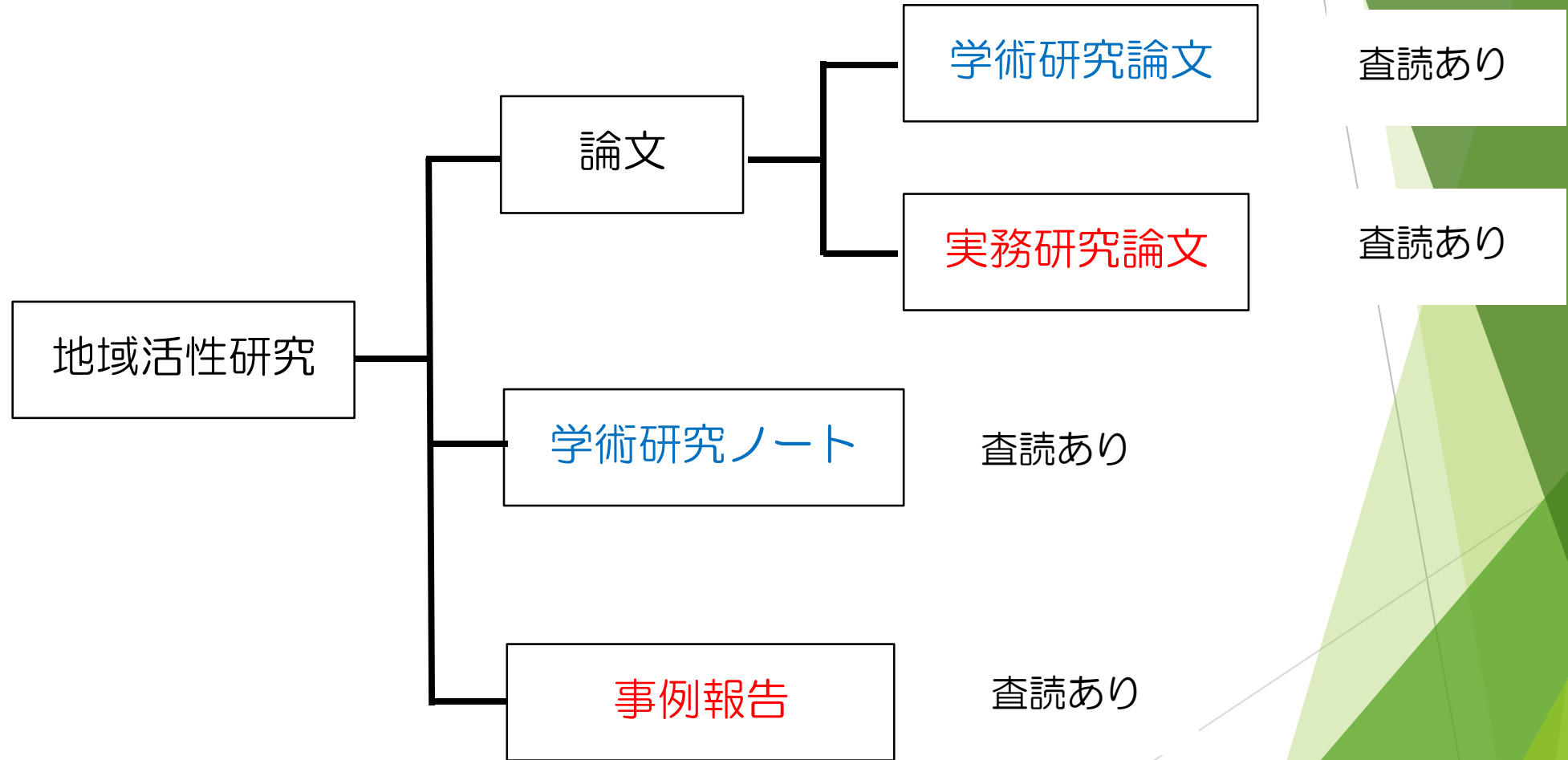
○主な著作

2004年 岩岡中正,伊藤洋典編『「地域公共圏」の政治学』ナカニシヤ出版
2007年 『チッソ支援の政策学－政府金融支援措置の軌跡－』成文堂
2012年 『環境被害のガバナンス－水俣から福島へ－』成文堂
2013年 堅田 剛編『加害／被害』国際書院
2016年 『政策力の基礎－意思決定と行動選択－』成文堂
2017年 『新版 環境被害のガバナンス』成文堂

○賞 罰

日本公共政策学会 奨励賞、地域政策研究賞 優秀賞、日本環境共生学会 著述賞
日本地域学会 著作賞、日本公共政策学会 著作賞

『地域活性研究』の新たな投稿区分



【序】

(1) 今、なぜ「実務研究論文」が求められているのか

- ・他の地域の取り組みを知りたいが、うまく情報が得られない。
- ・他の地域では成功しているのに、地元では上手くいかない。

⇒現場で役立つ知識（**実践知**）が個人資産化している。

〈背景〉

- ・医学では、研究と実務が直結－医者は研究成果をもとに患者を治療する。
- ・社会科学等では、研究と実務が分離－実務家は自らの実践知で解決に取り組んでいる。

(2) 実務家にとって、「実務研究論文」を書くメリットは？

- ・自らの経験で得た知識で、より多くの人たちを幸福にできる。
- ・分析力・理解力、人に伝える力が確実に向上する。
- ・実務上の経歴だけでなく、研究論文としての実績にもなる。
- ・将来を拓く足かかりとなる（将来の選択肢が増える）。

(3) 「実務研究論文」の難易度はどのくらい？－未経験者でも大丈夫か

- ・ 難易度は〈中の上〉くらい

一定の時間はかかるが、「よし!」と本気になりさえすれば、論文を書いたことがない人でも大丈夫。

(4) 効率よく書き上げるには？

- A. 自分の得意分野、経験した分野、一番関心のあるテーマを選ぶ。
- B. 「脳という情報処理装置」「実践知」の特性を知る。
- C. 「実務研究論文」に求められる内容を確認する。
- D. 「論文作法」を知る。

1. 「脳という情報処理装置」は怎么样了？

(1) システム I (無意識・自動思考／直観)

- ・ 外部からの情報は、まず「システム I」で自動処理される。
- ・ 意思決定の情報処理の95%は、無意識の領域にある「システム I」で行われている。
- ・ 「システム I」が、日常の言動のほとんどを処理。
- ・ 膨大な情報情報をパターンやイメージとして一瞬で一括処理できる。
- ・ 無意識、自動作動するシステムで、疲れにくい。
- ・ 私たちはそのことに気づかないし、何がどう処理されているかも知らない。

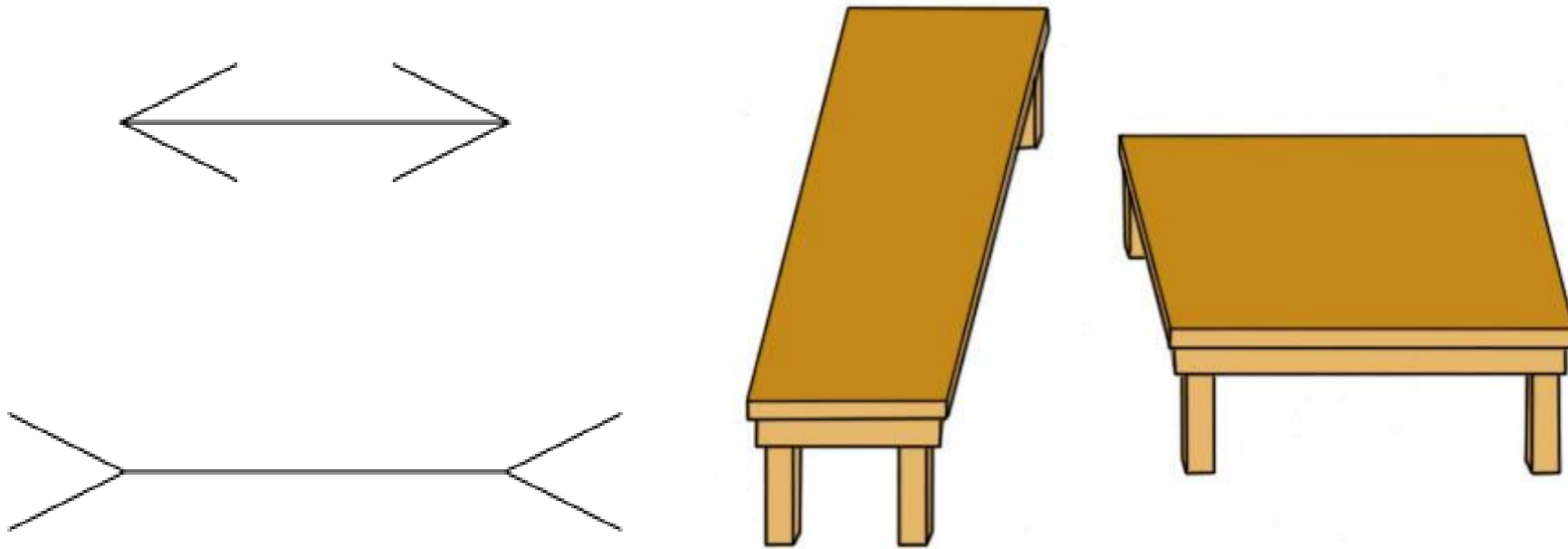
(2) システムⅡ（論理・意識思考）

- ・ 人類が最後に獲得した能力が「理性（論理思考回路）」
- ・ 論理的思考に基づいた、より冷静で正確な判断ができる。
- ・ 情報の処理スピードがとても遅い。
- ・ 意識して集中しなければならず、すぐに疲れる。
- ・ 2つ以上のことを同時には処理できない。

⇒ 「システムⅠ」が〈これは「システムⅡ」で確認する必要がある〉とアラームを出した時に「システムⅡ」が作動する。
それ以外の時は、「システムⅡ」は省エネ（スリープ）モード。

(3) 「システムⅠ」と「システムⅡ」の関係

【問】 2つの矢印の横線、2つの机は、どちらが長いですか。



(答) どちらも同じ。

2つの机の縦と横の長さも1 : 2で同じ・・・これが「錯視」

- 私たちの意識には、送信回路しかない無意識の脳の領域から送られてくるので、私たちが「長さは同じ」ことを知っても、「錯視」を変えることはできない。

【問】 同じ商品に分けて、それぞれ「50%OFF」「半額」「2個買えば1個無料」の名札をつけた。
売り上げはどうだったでしょうか？

(答) いずれも値引き幅は同じなので、売り上げは変わらない。
…これが「システムⅡ」が出す結論。

しかし、実際の売り上げは「2個買えば1個無料」 > 「半額」 > 「50%OFF」

- ・これは、「システムⅠ」が「2個買えば1個無料」に一番お得感を感じるため。
- ・「システムⅠ」は不合理な結論を出すことも多いが、それには一定の傾向がある。
- ・私たちの意思決定や行動選択のほとんどを「システムⅠ」が行っていることに、私たちは気づいていない。

(4) 実践知に基づく「確信的直感」

- ・「システムⅠ」には、大型コンピュータにも劣らないスピードで、膨大な情報を正確に処理することができる能力もある。
- ・これが、実践を積み重ねて得た知識・スキルをもとにした「確信的直感」

例：2018年、最強の将棋AIが7億手以上読んでたどり着いた最善手を、高見叡王は4秒で指した。(ノートパソコンでは12分かかる。)

- ・しかし、私たちの意識には、「システムⅠ」から、処理結果だけが送られてくるので、どのような思考を経てその結論に至ったのかは、わからない。
- ・「なぜその行動を取ったのか」と問われた時の私たちの答えは、実は「システムⅡ」が後になって考えた、もっともらしい理屈に過ぎない。

(5) 「システムⅡ」から「システムⅠ」への移行

- 脳の重さは体重の2%だが、エネルギーの20%を必要とする効率の悪い臓器。脳には、効率の最適化を図る〈最小努力の法則〉が組み込まれている。
- 効率の悪い「システムⅡ」が同じ作業を繰り返していると、〈最小努力の法則〉が作動し、「システムⅠ」にその作業を自動処理するための、新たな情報処理回路が作られる。

(例) 楽器、スポーツ、外国語、仕事での行動選択など。

- 新たな情報処理回路が永久回路として定着するには、一定時間以上、同じ行動を繰り返す必要がある。

1,000時間の法則、10,000時間の法則

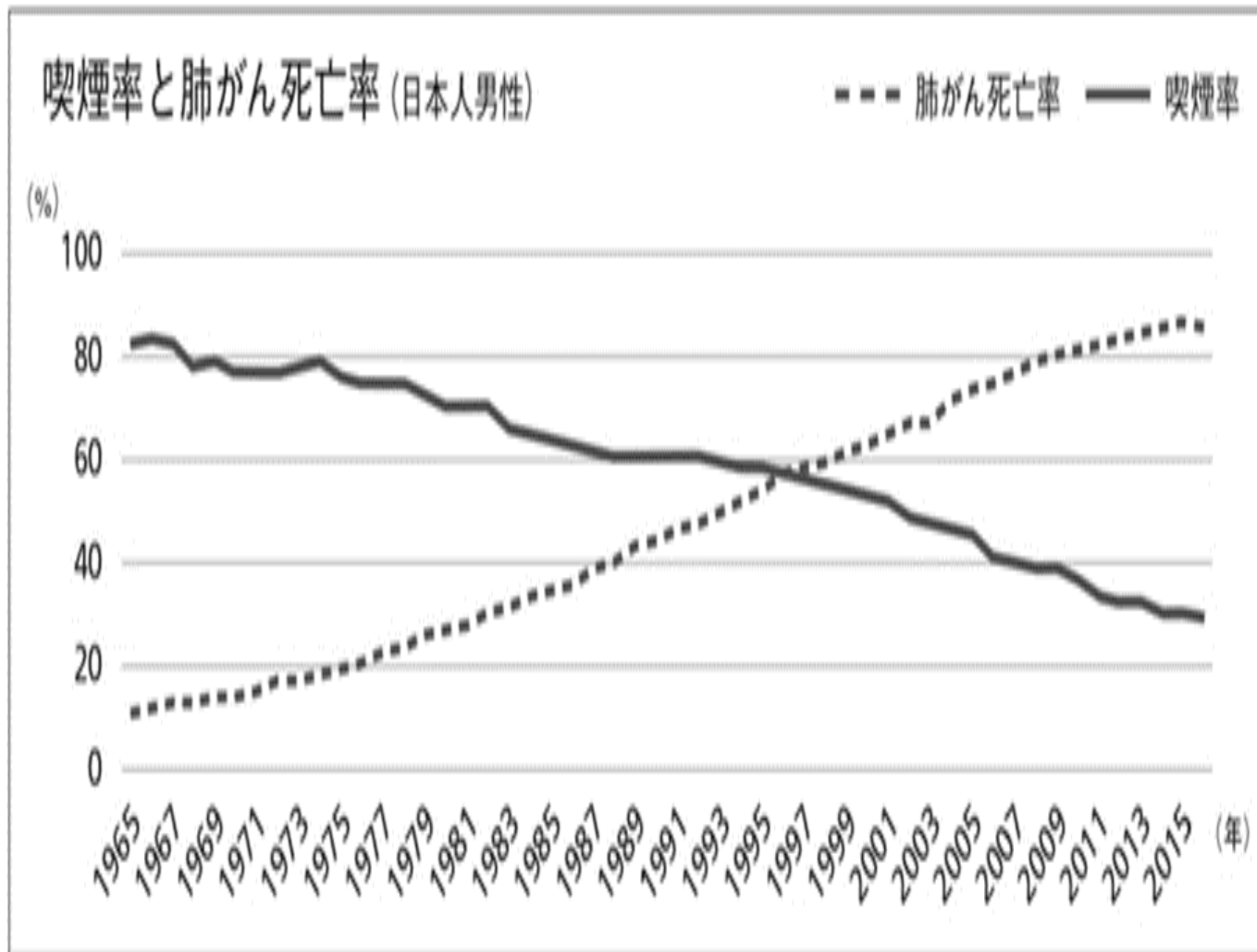
- 処理結果は、非言語の「実践知（暗黙知）」として「システムⅠ」に蓄積される。

(6) 「実践知」を言語化するには

- ・ 実務家の日常業務は、その時々々の局面に合った最善手と思われる行動選択の積み重ね。
- ・ 実務家には、囲碁、将棋の〈定石〉〈手筋〉にあたる知識が、「実践知」として蓄積されている。
- ・ 課題解決には、乗り越えなければならない局面が必ずいつくかある。その時、あなたはなぜその行動を選択したのか、必ず理由がある。その理由を「システムⅡ」で考えて言葉で書き起こす。
- ・ 「システムⅠ」は正誤を瞬時に自動判断し、私たちの意識に感覚信号（違和感や納得感）を送っている。
- ・ 〈何となく違う〉〈何か足りない〉といった違和感がなくなるまで、「システムⅡ」で理由を考える。…「実践知」の言語化は、自分を探検する作業。

(4) 「システム I」からの〈違和感〉信号とは

【問】あなたは、下図の情報を入手しました。このグラフから導き出せる「喫煙」と「肺がん死亡率」の関係を答えて下さい。



(答) 「システムⅡ」が正常に作動していれば、直ちに〈喫煙する人が減ったので、肺がんで死亡する人が増えた〉という結論にたどりつく。

・しかし、〈喫煙しなくなったから肺がん死亡者が増えた〉という結論に、私たちは強い〈違和感〉を覚える。…これが「システムⅠ」からの信号

⇒これは、〈手持ちの情報・知識とは不整合なので、**必要情報を収集・検討して違和感を解消せよ**〉という、「システムⅠ」から「システムⅡ」への指示信号。

⇒脳は情報処理装置なので、不足する情報を収集して「システムⅡ」で考えない限り、〈違和感〉は解消されない。

① 確かに、喫煙者は非喫煙者に比べて、男性で4.5倍、女性で4.2倍、肺がんになる確率が高い。

しかし、

② 今、肺がんになるのは、タバコを吸っていない人が大半。

③ 女性の喫煙率（10%台）は変わっていないのに、肺がんは最近40年間で5倍増。

④ 英国とフランスの喫煙率はほぼ同じだが、英国の肺がん死亡率はフランスの約2倍。理由は不明。

⑤ 男性で34%、女性で6%は喫煙が原因だと考えられるが、残りは、高齢化、女性ホルモン「エストロゲン」、汚染大気物質など、複数の原因と推定されている。

(答) 喫煙は、確かに肺がんの原因の1つだが、この他にも加齢、女性ホルモンの「エストロゲン」、大気汚染物質、室内微粒子、β-カロテンなど、複数の原因がある。ただし、十分には解明されていない。

⇒ここに至って、ようやく〈違和感〉が解消されることになる。

(5) 〈違和感〉解消の自動化

この種の作業が習慣化している人は、「システムⅠ」が〈違和感〉を感知すると

- ① 「システムⅠ」が自動作動し、ほとんど無意識にネット等で必要情報を収集
- ② 得た情報をもとに「システムⅡ」が検討し、「システムⅠ」に自動返信
- ③ 「システムⅠ」の〈違和感〉が解消されるまで、作業が自動的に繰り返される。慣れるにしたがい情報収集や思考も効率的になり、所要時間も短くなる。

⇒新たな神経回路が定着すると、本人は（呼吸するのと同じように）半ば無意識に気にもとめずに行うようになり、面倒という意識もない。

⇒論文を書く時はもちろん、仕事や日常生活でも、とても役立つスキル。

※以下の3～6は、学会HP(「地域活性研究」投稿欄)、JKサイトにも掲載

3. 「研究論文」に求められるものとは？

一般的な報告書と違い、「研究論文」には次の事項を満たしている必要がある。

- (1) 新規性：論文の内容に、何らかの新しさ（独自性）がある。
- (2) 有効性：論文の内容が社会の発展に何らかの意味で役立つ。
- (3) 信頼性：論文の内容が理解でき信頼がおける。

4. 「事例報告」と「実務研究論文」の違い

(1) 「事例報告」とは？

- ・「事例報告」は、PDCAを取りまとめた事業報告、実態調査やアンケート調査を取りまとめた報告を言う。
- ・「事例報告」では、〈分析・考察〉の有無は問われない。

(2) 「実務研究論文」とは？

- ・〈分析・考察〉を加えて、他の地域でも、課題解決や目標実現に役立つ具体的な知識・ノウハウが含まれているもの。

5. 「実務研究論文」の項目立ては？

統一された基準はないが、「序論、本論、結論」が基本。

(1) はじめに（序論：全体の5～10%程度）

- ① 背景：取り上げる地域課題の社会的背景や現状
- ② 目的：研究の目的と意義を記述。

(2) 事例（本論1：全体の2/3～70%程度）

読者は全く事情を知らないことを念頭に、全体像がわかるよう丁寧に記述。

① 事例地域の説明

歴史的背景や特徴、現状などを記述。

② 課題の説明

取り上げる地域課題を記述。

③ 解決（実現）手段の説明

どのような考えに基づいて、どのような体制、やり方を取ったのか記述。

④ 実行プロセスの説明

実施に関する手順や方法を具体的に記述。

⑤ 結果・成果の説明

実施結果を書き、課題がどの程度解決したか、地域社会にどのような変化（成果）が生じたのかを記述。

（注）アンケートや実態調査結果の分析を中心とする場合は、必要な範囲で①～⑤に触れた上で、調査結果とその分析を詳しく書く。

(3) 分析・考察（本論2：全体の10～20%程度）・・・論文の肝

- ・ 事例や調査結果をもとにした現実的・実践的な手法や解決策の提示
事例の分析・考察を通して明らかになったこと = **他の地域にも役立つ知識・ノウハウ**を記述する。

⇒ ポイントは、**具体的**であること。

〈自治体と住民の連携が必要〉だけでは抽象過ぎてわからない。

どの段階で、誰が、何を、どのようにすればよいか、がわかるよう記述する。

(4) まとめ（結論：全体の5～10%程度）

論文の主なポイントを要約して記述。今後の課題含む。

6. 「実務研究論文」「事例報告」を書く際の注意事項

どの職場でもルールがあるように、論文にも基本ルールがある。実務の報告書より厳格なので注意が必要。

(1) 文章等の形式

① 「です・ます体」ではなく、「である体」で書く。

(例) です⇒である 考えます⇒考えられる

② 話し言葉（口語体）は使わない。

(例) だって⇒なぜなら けど・だけど⇒しかし なので⇒したがって

③ 語句の表記、送り仮名を統一する。

(例) 従って・したがって：取り扱い・取扱い・取扱：第一に・第1に

④ 読点の位置を統一する。

(例) 理由は第1に～ 理由は、第1に～ 理由は、第1に、～

⑤全角・半角を統一する。

論文では、数字や英字は、通常〈半角〉を使う。

⑥図表について

表－文字・数字と縦横罫線だけで構成されるもの。

図－上記以外のもの全て（グラフ、チャート、写真、絵など）。

タイトルは、表は上に、図は下に書く。表、図ごとに通し番号をつける（図100）。

⑦図書や論文等の図を引用する場合には引用元を明記し、自分で作った場合には、著者作成、と記す。

⑧アンケート・ヒアリング調査について

対象者、調査年月日、調査方法について、本文または註記に記載。

(2) 記述に関する注意事項

①盗用・剽窃の禁止。

他人の著作や研究成果、統計データなどを無断で使用することは厳禁。

- ・ 引用する場合には、必ず「 」で括り、引用元を明記する。
- ・ 要約記載する場合も、〇〇（2020）『〇〇』の要約記載である旨を註記する。
- ・ 自身の著作・要約や研究成果、統計データでも、公表・公刊されているものは、同様に引用元を明記。（自己剽窃の防止）

②「推量表現」は使わない。

- ・「推量」とは、全くの想像で推し量ること。
論文では、必ず根拠が求められるので「推量表現」（例：かもしれない、～らしい、のようだ）は使わない。
- ・事実や情報を基にして推し測る「推定・推察・推測表現」を使う。
例：〈根拠となることを前段で述べた上で〉
～と推定（推察・推測）される。～と考えられる（認められる、思料される）

③疑問形は使わない。

- ・疑問形で終わる文章はNG。
例：一体どうなっているのだろうか？ 果たしてこれでいいのだろうか？
- ・読者は「自分に尋ねられても・・・」と誤って思ってしまう。
- ・事実に基づく分析、評価、考察を書くのが論文。

④情緒的、感情的表現や故事成語は使わない。

例1：とんでもないことだ、言語道断、許せない、好感が持てる、嘆かわしい、感動・感心した、心が痛む、失望・落胆した、不愉快である、呆れた
…このような表現はNG。

例2：まな板の鯉、飛んで火にいる夏の虫、烏合の衆、四面楚歌、呉越同舟
…論文ではなくエッセイになる。

⑤事実の単純化、紋切り型の表現に注意する。

- ・根拠なしの断定は控える。

例：「行政が住民の意見を聞かない場合もある」とは言えても、
「行政は住民の意見を聞かない」とは言えない。

⑥学知の使い方

- ・学知は、先人が積み上げてきた「知識の体系」。
- ・特徴は、複雑な事象を分析・整理し、読めばわかるような言葉で表してあること。
- ・思考効率を上げるとともに、書きたいことを明確に、わかりやすく整理するためのツール。

(注)

- ・「実務研究論文」の場合、あえて学術理論やモデル使わなくても分析、考察ができる場合は、無理に使う必要はない。
- ・実務家が、実践で「使える知識・ノウハウ」を書くことが最も重要。

(3) 実務家が論文を書く際の注意事項

①論文のレベルは、入手した情報の精度と量に依存する。

- ・脳は情報処理装置なので、自分が最も詳しい分野か、強い関心があるテーマを選ぶこと。

疑問、わからないことが全て解消するまで情報を収集する。

②自分だけの「自明の理」に注意する。

- ・実務家は、当たり前と思っている〈定石〉〈手筋〉、苦勞せずに自分で解決できることについては、無意識に説明を省略し、結論だけを書きがち。

⇒地域課題解決のプロセスでは、必ずポイントとなる幾つかの局面がある。

その局面で「いつ、誰が、何をどうやったからクリアできたのか」「なぜその行動選択が必要だったのか」を、面倒でも丁寧に書かないと、他の人には〈なぜ、そう考えたのか、その選択をしたのか〉がわからない。

③自分にしかわからない「隠語」に注意。

- ・実務家は、

- (i) 専門家や仲間内だけで通じる隠語
 - (ii) 自分だけにわかる一言を半ば無意識に使っている。特に〈結論〉を感覚的な一言で言いがち。

例：それしかない、やるのは当然、愚かな選択

⇒膨大な情報の処理結果を一言に込めているので、同様の知識、経験がなければ、読者にはその意味がわからない。

④思い入れが強いほど冗長になる。

- ・思い入れがあるほど、満足するまで表現を変えて同じ事を繰り返しやすい。

⇒読者にとっては退屈で、冗長・緩慢な文章になるので注意が必要。

⇒引き締まった文章とするには、多めに書いて削ぎ落していく。

(終わりに)

実務研究論文を書く際の基本定石

- (1) 決め手は「情報の量」・・・これで論文のレベルはあらかじめ決まる。
- (2) クイック・アクションに損はなし・・・・・・日常業務と同じ。
- (3) とりあえず、2~3割多めに書く・・・材料さえ揃えば、料理はできる。
- (4) デッドラインは早めに・・・「ぎりぎりグセ」は後悔のもと。
- (5) 〈歩く辞書〉を上手く使う・・・〈実務論文アドバイザー〉は12名
〈学術論文アドバイザー〉は 7名 (2022.4.16現在)

※ 「天網恢恢疎にして漏らさず」

努力は、その時は誰からも評価されなくても、いつかは必ず報われる。
それは人生の思いがけない時に、思いがけない形で訪れる。

・・・楽しみにして下さい!

1.エントリー：2022年4月11日～5月16日

2.投稿期限：2022年6月20日…約2か月（9週間）後

3.例

⇒〈何を書くか〉を、とりあえず決める（1週間）

⇒学会HPから指定フォームをダウンロードして

使える資料やネットをフル活用して必要情報を収集し、〈取り組み事例や調査結果〉をとりあえず10ページ書く（3週間）

⇒〈分析・考察〉を書く（1週間）

⇒〈はじめに〉〈おわりに（まとめ）〉を書く（1週間）…合計で12～13ページ

⇒納得いくまで修正し、10ページ以内に削って文章を引き締める（2週間）

⇒〈和文要約〉を書き、誤字・脱字や論文作法に従っているかを確認（1週間）

4.ポイント

- ・論文はダラダラ取り組むものではなく、やると決めたら一定期間集中して取り組むもの。
- ・「システムⅠ」の感覚信号に耳を澄ませ、納得感、手応えを感じるまで考えること。

【第2回目 予告】

師範 西川洋行 先生（県立広島大学）

投稿を考えている皆さんの持つ疑問、例えば

- ・ 実務論文と学術論文では、具体的にどこがどう違うのか。
- ・ 各投稿区分に込められた趣旨とは。
- ・ 実務研究論文が何を目指し、どのような内容の投稿を期待しているのか。
- ・ 実務研究論文は、どのような基準に基づいて査読（評価）されるのか。

といったことについて、詳しい解説があります。ご期待下さい。

※ 疑問や相談したいことがあったら、いつでもご連絡下さい。

学会誌編集委員会は、わが国で最も濃密なサポートを目指しています。
とりあえずは、永松（nagamatu@ed.sojo-u.ac.jp）まで。

（了）